特別企画３

「満洲」表象と日本文壇

－ 横田文子と牛島春子 －

池内 輝雄*

Ⅰ．はじめに

表題の「「満洲」表象と日本文壇」について、ここでは日本人作家である横田文子と牛島春子をとりあげたい。この二人は若い日、プロレタリア運動にかかわり、官憲による運動の壊滅後、1930年代後半、保田與重郎らの「日本浪曼派」に参加(横田)、「満洲」に移住・移動は、「日本浪曼派」の分派「満洲浪曼」の同人として文学活動を行ったという、よく似た経歴を持つ。こうしたいわば屈折の大きい経歴の作家による「満洲」表象の意味、および「満洲」における日本(国)との関係性(日本人意識)をさぐることを小論は試みる。一般に戦前・戦中の「満洲」文学はまだ充分な評価が与えられていない。特に1940年前後の植民地への移住・移動に起因する日本・日本人意識の問題を、いわば個の側から追求した文学を見直すことは重要であり、それらを組み込んだ戦前・戦中の文学史が構築されるべきだと考える。

＊ 国学院大学 大学院客員教授、国学院大学名誉教授。

교보문고 KYOBO Book Centre

Ⅱ. 1930年代日本文学の問題 －『暗夜行路』を例として

ここでは1930年代の日本文学を考える手立てとして志賀直哉の代表作『暗夜行路』をとりあげる。志賀直哉らが文学活動を公にしたのは1910年、同人雑誌「白樺」の創刊からである。この年はいうまでもなく「日韓併合」、「大逆事件」など、日本は国内外でナショナリズムの強化・徹底を図った。そのなかで「白樺」の同人は「自分勝手なもの」(「創刊の辞」)を書くこと、いいかえれば、個性の伸張、自由の謳歌を主張し、ヨーロッパの新しい藝術を積極的に紹介することにつとめた。2010年(今年)はまさにその100年目、政治・社会の動向とともに、文学のうえでの試み、その意義はあらためて問いなおされなければならない。

『暗夜行路』(1921～1937)には、「白樺」創刊時から3年ほどの間、すなわち1910年代前半頃の世相を背景に、時任謙作を中心とする知的青年たちの行動・精神の軌跡が描かれる。若き日、彼らは毎夜のように吉原の茶屋、銀座のカフェーで遊興し、放蕩の生活を送る。それは1920年代の後半から30年にかけて「昭和モダニズム」と称される時期に現れるモダン・ボーイたちの先駆的存在だったということができる。

謙作は、そうしたなかでやり場のない不快・不安の感情にさいなまれ、「何か知れない重い物を背負(しよ)はされてゐる」、「気持の悪い黒い物が頭から被(おひ)かぶさつてゐる」(「前篇・第一」九)と日記に書く。「何か知れない重い物」とは何か。彼をうっとうしく封じ込めるものはなにだったのか。

彼の不快・不満の感情は実家の父の存在に起因する。父は遠くから常に彼の言動を監視し、ことさら結婚については自由を許さない。こうした父と家に対する感情、「総ての人が自分に悪意を持つてゐる」(「第二」十四)という対社会意識、さらに夢のなかでは自身が「反逆人」・政治犯として官憲に逮捕される「戦慄」(「後篇・第三」七)を覚える。また、朝鮮旅行のさい、日本人による朝鮮の土地収奪の実態に不満を抱く「不逞鮮人」(「第四」二)に同情し、政府・社会を批判する。『暗夜行路』の草稿と見られる「未定稿154」でも「此処(京城)へ来ると日本人といふ国民は如何にもイヤな国民だといふ気が起る。(…)例へば歴史のやうな

교보문고 KYOBO Book Centre

ものでも日本と朝鮮との関係は決して本統の事は教え(ママ)ないのだから」と植民地政策を批判する。

しかし、物語は、謙作が祖父と母との間に生まれた「不義の子」であること、つまり、さまざまな対立が個人の意志・意識の次元を超えた「運命」に起因することへと「移転」[1]してしまう。さらに結末では、大山の山中で謙作を「芥子粒程」までに極小化させ、大自然のなかに融合する感覚を体験させる。謙作の達観した、いわば東洋的な「悟り」の境地は、日本の近代文学のたどり着いたひとつの極点を示すもので軽々には批判できないが、「何か知れない重い物」を背負ったはずの青春の遍歴はともかくも終息してしまうのである。

いま、『暗夜行路』をとりあげてきたのは、日本の近代文学のある意味での典型を見ようとするためである。『暗夜行路』 が完稿した1937年は日中戦争の始まった年であり、この間に欧米の「近代」文化を夢見た「昭和モダニズム」(新興藝術派文学)は泡沫のごとく消滅し、「夜明けは間もない」(中野重治「夜明け前のさよなら」1926)と歌ったプロレタリア文学も、ほとんど壊滅していた。そうした空白期に台頭したのは保田與重郎らの日本浪曼派[2]であった。

少し後年だが、中野重治[3]はこの物語が執筆された長い期間は「いろんな政治的事件、それから満洲事変、ふたたびいろんな政治的事件を経て支那事変」の起こった「特殊な歴史的時期」であったにもかかわらず、それらが反映されないことをはじめ、構想が 「途中で行方不明になる」として物語構造や叙述の欠陥を徹底的に批判し、「日本私小説の問題」、いわば作者と読者のなれあいとした。こうした批判は、『暗夜行路』のみならず、プロレタリア文学運動・モダニズム文学がまさに「行方不明」となった1930年代を、力及ばなかった自らの無念さもこめてふりかえるものであったろう。

---

1) 三好行雄「仮構の<私>「暗夜行路」志賀直哉」(『作品論の試み』至文堂、1967)。
2) 1935、6年、プロレタリア文学の崩壊後に結成される社会主義的傾向の武田麟太郎・高見順らの「人民文庫」と、日本古典主義的傾向の保田与重郎・亀井勝一郎らの「日本浪曼派」とは「転向という一本の木から出た二つの枝だ」(高見順『昭和文学盛衰史』㈡(文芸春秋新社、1958)という説が有力である。
3) 中野重治「『暗夜行路』雑談」(大正文学研究会編『志賀直哉研究』河出書房、1943)。

교보문고 KYOBO Book Centre

Ⅲ. 横田文子の「満洲」表象

3.1.「満洲」移住以前

横田文子は1909年長野県飯田に生まれ、高等女学校在学中から創作を続け、30年、全日本無産者藝術連盟(ナップ)の地区責任者となり、以後上京と帰郷のなかで小作人・工場労働者の争議を描く「導火線」(「女人藝術」1931.9)を発表し、中野重治4)から「プロレタリア的な藝術方法」、つまり理論が伴っていないと批判された。「導火線」はいまから見て習作としての荒削りは否めないが、中野のいう理論不足という批判は欠点というよりむしろ長所ではなかったか。以後の物語が原因を理詰めで追求することよりも、そこから派生する心情の方に重点が置かれるからである。

それを端的に示したのが、日本浪曼派(「コギト」)に接近した頃の「白日の書」(「婦人文藝」1936.2.4～6)である。「文学をやり、左翼の運動にもはいつた」経歴を持つ「私」は、京都の資産家の娘と知り合い、同性愛の関係となる。愛人への耽溺と退廃の生活、それゆえの外部の厳しい批判の眼、そこから生じる不安・焦燥・絶望・自己嫌悪。こうしたなかで意識は執拗に自己の内部へとぐろを巻くように向かう。その結果、どこにも出口なしの状態に陥り、自殺未遂をし、さらに故知らぬ復讐の念から愛人にたいして殺害を意図し、ついには幻覚・狂気へといたる。こうしたひとり相撲に似た空しい足掻きの大本は、具体的な1人物との関係というより、もっと大きな、たとえば「私」を取り巻く社会・時代とのそれであったと見ることができる。この物語には社会・時代に同調できない「性格破産」の「余計者」の姿が表されている。

この点、保田與重郎5)が「激しいけふの精神の罠の構造や、けふの切実の問題のさながらの企てがたくみに描かれてゐる」と認め、また、芥川賞候補作として選者のひとりである川端康成6)が「現代の退廃」を描きながら「退廃に溺れるところはなく、現代に傷つけられた痛ましい嘆きで、鋭く真実を求めて行かうとする」と批評

4) 中野重治「文芸時評」(「女人芸術」1931.10)。
5) 保田与重郎「文芸時評」(「日本浪曼派」1936.3)。
6) 川端康成「芥川賞予選記—文芸時評」(「文学界」1936.9)。

교보문고 KYOBO Book Centre

し、つづけて発表した「落日の饗宴」(「文藝春秋」1936.10)でも、阿部知二[7]が太宰治の「創生記」、打木村治「地底の墓」と並べて「何かしら痛ましい焦燥」、「何ものかへの信念の喪失」と指摘した。「退廃」・「焦燥」・「喪失」こそ、若い世代のどこにも行きようのないまさしく「痛ましい」状況を表す言葉であったろう。そこに横田文子の日本を出国し、「建国」されたばかりの「満洲」へと移住する動機も見てとれる。

3.2.「満洲」移住以後

横田文子は1938年6月、日本浪曼派の同人の北村謙次郎に誘われて移住し、望月百合子の紹介で大新京日報社の記者となり、北村を中心に創刊された「満洲浪曼」の同人となり、創作活動を行った。移住後の物語に「霧」(「作品」1938・11)、「美しき挽歌」(『満洲国各民族創作選集』(1)、創元社1942) ほかがあるが、寡作である。

「霧」は短編ながら注目すべき物語。「南方の小さな島・大島」(「大島」は伊豆大島だが、「満洲」のメタファーともとれる)に移り住んだ「俊子」は、訪ねてきた友に「あれがいけないんだ、いや嘘なんだ(…)われも亦東洋の女なりと云ふあれね(…)美しいけれどね、その美しさが悲しいんだ」と発言する。闘うことを回避し、諦念をもって「美」とする「東洋」的な生き方への批判である。ここには先に見た『暗夜行路』の主人公とは別の生き方が模索されている。

「美しき挽歌」は横田文子の「満洲」もののなかでもすぐれた短編である。全体は「風」・「恋文」・「あるクリスマスの物語り」の独立した３つの短編から構成されている。第１篇の「風」は「新京」・寛城子の郊外にある日本陸軍官舎付近の野原で遊ぶ日本人とロシア人の少年たちの物語。彼らは１羽の雀の脚を縛り、空中に飛ばそうとしている。そこに遅れてひとりのロシア人少年がやってくる。彼は「萎えたやうな、細く小さな足」で、「左の腕が完全に肩から失はれてゐる」。少年たちは彼を仲間はずれにし、雀を飛ばして死へと陥れ、やがて家路につく。後に残された彼は冷たくなった雀を「上着のポケットに大切さうに蔵ひこむ」と「幸福」そうに帰っていく。東栄蔵[8]の「身体障害児であることと、貧しい白系ロシア人

7) 阿部知二「文芸時評―写実の局地・時勢に対する関心」(「東京朝日新聞」1936.10.3)。

교보문고 KYOBO Book Centre

であることによって、二重に差別されている」少年が雀を大切に扱う「悲しみとやさしさがしみじみと伝わってくる」という読みに素直に従いたい。同じ寛城子を舞台にした第３篇「あるクリスマスの物語り」には、あるロシア人の老婆の姿が描かれる。「私」は２年ぶりに訪れた市内でたまたま彼女と出会い、彼女がいまは家族と離別し、さびしい暮らしをしていることを知り、彼女の陋屋でクリスマスの宵を過ごすことにする。ともに語り、彼女がかつてよく歌っていた歌をせがむ。すると、彼女は歌いながら「双眼」から「大きな涙」を流すのを目撃し、「一切が分かつたやうな気」がする。「私」は亡命ロシア女性の半生の苦難を瞬時に理解するのである。ここにも時代や社会のなかの弱者にたいする作者の温かい眼が光っている。

なかでも問題なのは、第2篇の「恋文」(原題「文」、「満洲行政」1939.12)である。「新京」に住む「私」は、某官庁に勤める「満人の青年」王と知り合い、文学談や世間話などをする間柄となる。その彼が最近「何か非常に苦しんでゐる様子」であり、「私」は「何か起らねばいゝがといふ危惧」(傍点―池内)を感じている。彼の最後の訪問となった夜、何かを秘めたその様子を「私」は「内心白状すれば、さうして取りすましてゐた私の気持の底には、何か得体の知れぬ不気味なものが流れてゐた」という。彼が帰った後も「自分の不安が一層深まる思ひ」(傍点―同)がする。

突然、彼は役所をやめ、帰郷する。彼はその経緯を車中で書いた２通の手紙で告白してくる。第１の手紙は「私」宛、第２の手紙は彼の思う人宛だが投函しなかったものである。第２の手紙では、彼の突然の退職・帰郷の理由が役所の上司の妻である女性への思慕と民族を超えた愛の困難さ、それも彼女の「無邪気さ」の陰に潜む「満洲」民族としての彼の誇りを傷つける無神経さにあったと伝える。

しかし、管見に入ったいくつかの論には見当たらないが、ここに描き出されるのは、彼が失恋に見せかけて出奔する真の意図とそれをひそかに感得し、胸に収める「私」の心情である。彼は第1の手紙のなかで「突然ですが、私は役所をやめて、明日、北方の故郷へ帰ることにしました。何故帰るか―そのことはきかない

8) 東栄蔵「横田文子の文学―「満洲」で描いた作品を中心に」(『近代日本と「偽満洲国」』日本社会文学会編 1997)。

교보문고 KYOBO Book Centre

でおいて下さい」(傍点―同)、「故郷」は「私以上に疲れてゐるかも知れません」と断る。しかし失恋の事情は「私」が読むことを期待して同封された第２の手紙で明らかなので、「きかないでおいて下さい」は矛盾する。つまり彼は故郷かどこかで、その理由を隠さなければならない何か重要な任務(たとえば反日運動のような)に就く決意を「私」に暗にきかせているのである。その真意を「私」は察知し、「王―の神経や感覚が、民族的な相違こそあつても、何か私のそれに近いものを持つていること、そしてそこのところだけで王―の悲しみを私が知り、むしろ同感に近いものを覚え」るのである。こうした「危惧」、「不安」、民族意識を超えた「同感」といった婉曲な言い方で、それ以上の言及はしない。物語のうえでそれを明らかにすることははばかられたのであろう。物語はこのように二重(多重)構造を持ち、ある種の抵抗の文学といえる。これが「満洲国」の公的メディア、「満洲行政」のもとでのぎりぎりの表現だったにちがいない。

この点、つぎに触れる牛島春子をはじめ、阿部知二、伊藤整、窪川稲子ら[9]国策に順応したエッセイ・探訪記などを書いた作家とは一線を画する。彼女は「満州」の地において日本・日本人意識から脱していたといえる。

9) 阿部知二「満洲の印象」(「観光東亜」日本国際観光局、1939.11)では、敦賀で「満洲」開拓に出かける人々を見て「北満の野原に鍬を入れると同じやうに、政治に、経済に、文化に、科学に人々はそこの新しい何物かを芽生えさせ、何物かを造り上げやうとしてゐるのであらう。そして新しい思想を、芸術を、この処女地のうへに植えやうとしてゐるのであらう」と感激し、飛行機から見た北満の野について「美しい土地」と手放しの礼賛をしている。伊藤整「駅で」(「観光東亜」1940.1)では、少年義勇軍訓練所を視察した帰りの最寄の駅で食堂に入り、「満人」の店が「何となく無気味で汚らしく見え」たが、日本の内儀が調理場に現れると、ちやんとした日本の正しい由緒ある料理に思はれて来る」とあからさまな差別感を述べている。窪川(佐多)稲子「大連の印象」(「満洲観光」満洲観光連盟・奉天市春日町鉄道総局、1942.3)では、「満洲人の生活が、日本人との関係で、すつかり落ちついてゐる」と感じている。

교보문고 KYOBO Book Centre

Ⅳ. 牛島春子の「満洲」表象

4.1.「満洲」とのかかわり

牛島春子は1913年福岡県久留米市に生まれ、久留米高等女学校を卒業後、非合法下の共産党の下で活動(のち入党)し、33年検挙され、保釈中の36年、牛島晴男と結婚し、「満洲」に移住。晴男は九州大学を卒業後、「満洲」の大同学院をへて「奉天」省属官に、結婚の翌年参事官、副県長に就任した。

牛島春子の「満洲」での第1作「豚」(「王属官」、「大新京日報」1937.5.22～6.4断続掲載)は、「王」という省公庁の属官が、農民の間で養豚に飼育税をかけるという不正が行われているのを暴き、「満洲国」建設に情熱を傾ける姿を描いたもの。作者は「農村を描け―「王属官」を中心に」(「赭土」1938.3)で農村を描こうとしたことについて「満洲国が(…)建国精神を体得した日本人で代表されると思つたら大変な違ひだ」、「封建軍閥時代の非人間的な残滓」を「真摯な努力が、王道楽土の肯定的要素として否定的要素を克服して行く」、と述べ、「私は熱情をもつて、満洲を描き度い」と結んでいる。「満洲国」の建設に賛同し、文筆をもって応えようとする作者の意気込みが明らかである。

ここで、夫の牛島晴男の官職名について触れると、「参事官制度」は名称が時期により「県自治指導員」「県参事官」「副県長」と変更されるが、職務は当初の農民対策(街村の育成刷新、土豪劣紳の排除、農業の育成、旧来の合作社「糧桟問屋」の搾取の廃止)、治安対策(討伐隊の実戦指揮)から、しだいに諸産業、軍事、開拓団などの日系市民対策に及ぶ政治・行政上の県最高責任者であった[10)]。

「王属官」はまさに「封建軍閥時代の非人間的な残滓」である農村の改革に取り組む「満洲」青年の姿を描くもので、「満洲国」の国策、なかでも夫の職務を間接的に補完する意味を持っていた。「王属官」は第１回「建国記念文藝原稿」の２等第１席(１等作なし)に当選したが、その発表紙面に「文教部砺教司社会教育科では建国精神発揚の趣旨の下に(…)「建国記念文藝賞」を募集鋭意審査中であつたが、このほど審査を完了」したという記事があり、「建国精神発揚」の実作と評価されたことが明らかで

10) 藤川宥二『実録満洲国県参事官』大湊書房、1981。

교보문고 KYOBO Book Centre

ある。

こうした傾向は、「雪空」(「満洲行政」1938.4、『満洲文芸年鑑Ⅲ』満洲文話会1939、『満州国各民族創作選集』(1)、前出)、「福寿草」(「中央公論」1942.9、『日本小説代表作全集』10. 小山書店、1943)にも見てとれる。

「雪空」は、武装警察組織である警務局の警務官が極寒の地で「匪賊」と交戦する物語。若い警務官「菅野」は学生時代にマルキストであり、インテリの弱さで敗北したという過去を持つ人物だが、「北満の奥地」に「喰ふために、云はば流れ流れて来た」という。しかし苛烈な戦闘に参加したあと、「裸の人間性が残らずさらけ出されるやうな、充実した命の燃焼」を感じ、「別の方向に発展し出した思念」を自覚するにいたる。多分に国策的な物語だが、知的青年の日本出国の事情、戦闘後の心情の変化など、見るべきところがある。

「福寿草」も警務局が舞台。上官不在の県公署が「共産匪」に襲撃され、警務指導官の「島田」は少数の日本人と「満洲人」の警務官を指揮して応戦する。戦闘の迫真的な描写は別として、ここでは、「県長」(「満洲人」)の「狡猾さ」や「得体の知れな」さへの不満、事に当たっての「満洲人」警務官への疑念(同民族同士の戦闘なので馴れ合いではないかという)、妻や女性たちの頼りなさなど、他民族や女性に対する「島田」の差別意識が問題となろう。戦闘が終了した時点で、「民族の命と命とがはじめてこの瞬間に手を握りあつたやうに思はれた。百の理論をとびこえて日本人と満洲人とが本統に運命共同体であつた」という国策に沿った「島田」の感想もつけ加えられるが、「満洲」経営の破綻に充ちた現状が(作者の意図を超えて)浮かび上がる。

また「女」(「藝文」1942.4、後『満洲国各民族創作選集』(2)、創元社1944)は、出産のため 「満洲」から九州に帰郷中の女性「和江」の戦時意識を描いた物語として注目される。彼女は産褥１週間後の12月25日、「香港陥落のニュース」を聞き、「胸一杯になり、涙が流れてしかたがな」く、「帰郷中にこの日本民族にとつて忘れることの出来ぬ大きな日にめぐり遭つた」という「幸福」感にひたる。彼女は「満洲」に６年暮らすうち、「何時の間にか満洲国の国民としての立場からものを考えさせる(ママ)やうになつてゐた」が、いま、戦勝の「ニュースのたびに「兵隊さん有難う」と見栄もはりもなく涙を流すことが出来」、「満洲国の国民から日本の国民に還元」

교보문고 KYOBO Book Centre

したことを実感する。さらに「日本民族は戦ふのこそ最も相応しい民族なのだ」、そのため「(女は)子供を産むことだ！」と心の底から叫ぶ。

「子供を産むことだ！」は「女は生む事。男は仕事」(『暗夜行路』「前篇・第一」九)を想起させるが、そうした男女差を超え、ここには「満洲」国民意識の生成によって増幅された日本・日本人意識が問題となる。日本出国が逆に日本意識の強化へとつながるというメッセージが内包された物語である。

4.2.「祝といふ男」の二重構造

作者の代表作は「祝といふ男」(「満洲新聞」1940.9-10、『日満露在満作家短篇全集』 春陽堂書店1940、「文藝春秋」 1941.3など)である。この物語は芥川賞の候補作となったが、川村湊[11]はその背景に、八木義徳「劉広福」など「いずれも満州、および蒙彊の地域に生きる日本人以外の他民族の人間を主人公とした作品」で「「民族」間の葛藤と融和の問題」が日本文壇の「指標」であったためという。しかしこの傾向はこの時期に限ったことではない。

物語に登場する、県長弁公処付きの通訳「祝廉天」は「満系らしからぬ一種の険しさ、鋭さ」を持ち、汚職による前副県長の更迭とかかわりがあるらしいとして日系職員から「追放」の声が上がっている。新しく副県長として赴任した「風間真吉」は彼に会い、「激しい日本人のタイプ」として注目する。真吉にとって必要なことは「満人社会」の正確な知識、そのために祝を活用することが必要だった。実際に祝は実務的な能力を発揮して農民のうそを見抜き、賭博を摘発し、訊問にも機械のような非情さで通訳する。軍馬購買のさいにも祝が馬主たちに話をつけ、成功する。こうした辣腕ぶりに彼に対する日系職員の態度も変ってくる。1年後、真吉に転任の知らせが来る。祝は一瞬、「弱弱しく哀れみを乞ふような」表情を見せるが、すぐ元に戻る。出発の前日、祝は妻に小さな封筒を差し出す。

従来説ではこうした陰影に富む人物・祝に注目し、北小路功光[12]は発表に近い時点で「祝は個人でありながらも、民族性を背負ひ、社会相を反映してゐる」

11) 川村湊『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本』岩波新書、1990。
12) 北小路功光「文芸時評―「祝といふ男」」(「満洲日日新聞」、1941.2.23)。

교보문고 KYOBO Book Centre

と指摘し、川村湊は「当地の日本人よりも日本的な職業倫理、官僚制度の原理に忠実」な人物、尹東燦[13]は「平等という「民族協和」」の体現者、実際は「満州国が欺瞞的国家であったように祝の忠実も欺瞞的な一種の世渡りの方法」と解釈してきた。いずれも祝を前景化し、彼と「満洲」民族・社会との相関をとらえることを主眼にした読みである。

また、坂本正博[14]は作者の伝記的事実を周到に調査したうえで祝の行為を検証し、彼の「<刃物の険しさ>は、建国の一時期まで残存した「民族協和」理念が、その実態においていかに脆弱なものであるかを次々に暴露していく」と、「満洲」建国体制の「脆弱」なことを指摘したが、この物語の作者「春子」は「満洲」の「現実」を「副県長としての晴男の視線の内に閉じられている」ため、「基本的には副県長の視線を通して見た祝像、つまりは<化石したような顔>の内側を垣間見た小説」にとどまったと批判した。坂本論は物語のなかの人物である祝を前景化しながら、そこに作者実体を重ねた読みといえよう。

ここでは、祝だけに限定せず、もう１つの構造、つまり風間真吉を前景化する読みもの可能性を指摘しておきたい。

真吉は「副県長」としてはじめて任に就いたようで、「実際一つの県を預つてみて三十余万の県民の上に生きた政治をしいて行くとなると日本人的感覚で満人達を割り切つて行くことがどのやうに危険なものであるか」と不慣れさを危惧している。彼は「南満」で官吏になりたての頃、同僚に祝に似た「満洲」人がいて「満人達の隠蔽主義をひつくりかへして行つたゝめに、周囲の満系からも日系からも快く思はれてゐな」かったことを思い出す。そうした失敗をおかさないためにはどうすればいいか。彼はそのために祝を利用しようとし、前述のように祝の御膳立てに従って事を進め、自ら計画し、責任をとることを避けていく。

13) 尹東燦「牛島春子「祝という男」論」(「芸文攷」7、2002.1)。
14) 坂本正博 「拝泉へのまなざし 旧満州での牛島春子の作品」 上下(「叙説Ⅱ」 01、2001.1、02 2001.8)(11)。

교보문고 KYOBO Book Centre

さらにわずか1年で転任ということも、「王道楽土」の推進のためにはあまりに短い。そうした制度上の欠陥も問題があろう。つまり、彼には「満人達の隠蔽主義をひつくりかへして行」くほどの心構えもなく、その後の責任もとりようがない。また、彼が転任のさい、祝から妻が餞別らしきものを贈られてもとがめだてしない。背任した前任者と同質なのである。

こうした植民地「満洲」における日本人官吏の、能吏ではあっても、ひ弱でふがいない人物に率いられた「国家」、「王道楽土」の建設がいかに不可能性に満ちていたか、その行き着く先は容易に見てとれる。

作者が物語を構想のさい、これらのことについてどれほど自覚的であったかどうかはここでは問わない。いいかえれば作者の意図を超えて(作者の無意識の領域が作用して)、物語が「満洲国」の実体をあますことなく表象してしまったといえる。その意味では坂本のいう「満洲」建国体制の「脆弱」性の指摘も生きてくる。このように作者の意図を超えて物語が別の意味を帯びることはありうるし、読みによって別の物語が生成することも大いにありうる。

敗戦後、牛島春子は「満洲」体験が「重い鎖」であったと述べたという[15)]。そう反省しなければならない要素は多分にある。しかし、「祝といふ男」に限っていえば、日本・日本人批判に関して免れるところがあったのではないか。

以上を踏まえながら、ともすれば批判に陥りがちな「満洲」文学を、それがなにを表象しえたかを検証し、見直すことは重要、かつ急務と考える。

牛島春子の年譜・書誌については、川村湊監修『牛島春子作品集』(「日本植民地文学精選集[満洲編]7」、ゆまに書房2001」)、坂本正博「牛島春子年譜(第二稿)」(「敍説Ⅱ」03、2002.1)、多田茂治(注15)によるところが多い。

(いけうち　てるお　國學院大學　大学院客員教授)

15) 多田茂治『満洲・重い鎖－牛島春子の昭和史』弦書房、2009。

교보문고 KYOBO Book Centre